

々増加し 2010 年度には 85.7%とも最も優勢な手術となった。

【考察】Ⅱb 群で摘出子宮重量が低値となり、手術時間が高値となった。これはエキスパート（技術認定医）以外の術者が比較的難易度の低い症例を選択したため、指導の時間を含むためと推測された。しかし、手術成績において最も重要な因子である出血量、合併症発症率に関しては差を認めなかった。その結果、確立した術式、確立した適応の基、LAVH は誰にでも安全に遂行できる手術であると考えられた。また、良性疾患に対する単純子宮全摘術の中で最も優勢な手術となっており、当科においては LAVH が標準化されたと言える。

単純子宮全摘術は産婦人科領域における基本手術の一つである。単純子宮全摘術には従来から腹式と腔式がありこの 2 法はすでに標準手術とされている。本論文は新しい手法である腹腔鏡補助下腔式単純子宮全摘術 (LAVH) がその中の標準手術と成り得るかどうかを科学的に検証したものである。申請者は当院産婦人科内視鏡手術チームの一員として長年本研究に取り組んできた。手術の標準化は術式の設定、適応の検討、標準化の順で行われるべきである。当院での LAVH は 1995 年から 2001 年の 7 年間はエキスパートによってのみ執刀され術式と適応が確立された。その後医局員全員が執刀する形で標準化に取り組んできた。その手術成績の詳細な検討結果を発表した。その結果、当院における LAVH は誰にでも安全にできる術式として確立されたと考えられた。また、現在本手術は 2010 年で良性疾患に対する全単純子宮全摘術の 85.7%を占めるまでに至っており、単一施設において標準化が完成しているものと考えられた。

近年、手術学の世界において「標準化」という用語が良く使われる。手術における標準化とは、多数の手術法の中から標準とされる手術術式を確立する過程である。近年とくに内視鏡手術の発達により、「内視鏡手術の標準化」が研究されるようになった。しかしながら、本邦、世界的に見ても一手術の標準化を科学的に検証した報告は皆無に等しい。本論文は腹腔鏡を用いた単純子宮全摘術の一手法である LAVH の標準化に関する研究であり、まさに新しい視点からの報告であるといえる。また本論文は日本産科婦人科内視鏡学会の機関誌である Japanese Journal of Gynecologic and Obstetric Endoscopy に英文で掲載予定である。よって学位授与に値するものと考えられた。

氏 名	片 岡 多恵子
学位の種類	博 士 (医学)
学位記番号	農 第 1 1 0 1 号
学位授与の日付	平成 24 年 3 月 22 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文題目	Retrospective Evaluation of Tumor Markers in Ovarian Mature Cystic Teratoma and Ovarian Endometrioma (卵巣成熟性嚢胞性奇形腫および卵巣内膜症性嚢胞における血清腫瘍マーカー値の後方視的検討)
論文審査委員 (主 査)	教授 星 合 呉
(副主査)	教授 奥 野 清 隆
(副主査)	教授 西 尾 和 人

論文審査結果の要旨

【目的】

代表的な良性卵巣腫瘍である卵巣内膜症性嚢胞 (OE) および卵巣成熟性嚢胞性奇形腫 (MCT) における腫瘍マーカー値の臨床的意義について検討を行った。

【方法】

OE321 例 (415 腫瘍) および MCT321 例 (504 腫瘍) を対象として、CA125、CA19-9、STN、SCC の各種腫瘍マーカー値と臨床病理学的所見との関連性について後方視的に検討を行った。

【結果】

OE と MCT における CA125、CA19-9、STN の平均値は、105.3 U/ml、58.0 U/ml、31.1 U/ml および 26.8 U/ml、246.8 U/ml、24.7 U/ml であり、また異常上昇率は、53.3%、38.9%、13.5% および 12.9%、50.6%、4.6% であった。一方 MCT における SCC の平均値は 1.6 ng/ml であり、異常上昇率は 33.7% であった。また、CA125 値は両側発生 OE 例、および閉経前 OE 例において有意に高値であり、CA19-9 値は両側発生 MCT 例において有意に高値であった。さらに CA125 値および CA19-9 値は OE と MCT のいずれにおいても腫瘍径との有意な関連性が認められたが、STN 値と SCC 値は腫瘍径との関連性を示さなかった。また検討症例における CA125 の最高値は OE における 9513 U/ml であり、CA19-9 の最高値は MCT における 25590 U/ml であった。

【考察】

卵巣良性腫瘍においても CA125、CA19-9、STN、SCC の各種腫瘍マーカーは異常上昇が認められ、特に OE における CA125、および MCT における CA19-9 は異常上昇例が高率であった。一方 STN は OE および MCT のいずれにおいても臨床病理学的因子との有意な関連性が認められず、OE および MCT を含む卵巣腫瘍の良悪性診断に有用である可能性が示唆された。

【結論】

卵巣腫瘍の術前良悪性診断は画像診断を含む総合的判断が必要であるが、特に OE および MCT における腫瘍マーカーを用いた間接的診断の場合には、CA125 および CA19-9 に加えて STN の追加測定が有用である可能性が示された。

片岡多恵子君の学位論文は良性卵巣腫瘍中最も高頻度に認められる卵巣成熟性嚢胞性奇形腫と卵巣子宮内膜症性嚢胞における血清腫瘍マーカー (CA125、CA19-9、STN、SCC) の測定値について免疫組織学的検討による発現の局在を含めて総合的に検討したものである。検討も卵巣成熟性嚢胞性奇形腫 435 症例、卵巣子宮内膜症性嚢胞 321 症例と多数例において検討がなされている。また最高値例は過去の論文報告中最も高値であった症例も報告されており、極めて興味深い検討である。

質疑においては、検討例における先天性転換酵素異常症の有無、腫瘍径別の臨床対応、悪性卵巣腫瘍特に卵巣明細胞腺癌との鑑別診断の可否、新規糖鎖抗原の同定、腫瘍マーカー疑陽性症例における将来的な対応等についての質問を行ったが、いずれも応答は適格かつ科学的であった。若年女性における妊孕能温存への臨床応用のために、STN の測定有用性を明らかとした点、および免疫組織学的検討により血清腫瘍マーカー値は卵巣成熟性嚢胞性奇形腫では発現母地である組織成分の多寡、卵巣子宮内膜症性嚢胞では腫瘍内容液の量に有意に関連する事実を明確にした点は、新規に報告された内容として特記される。

以上から、片岡多恵子君の論文は医学博士授与に値するものと判断する。

博士論文の印刷公表	公 表 年 月 日	出版物の種類及び名称
	年 月 日 公表予定	出版物名
	公 表 内 容	Journal of Obstetrics and Gynaecological Research
	全 文 ・ 要 約	発行予定